大東つれづれ帳

〝卒業〟

（最終回）

三月十一日は市内の公立中学校の、そして三月十八日は公立小学校の卒業式である。

卒業式とはいっても、私が卒業生であったころのイメージとは随分様子が違う。

「君が代」「仰げば尊し」「螢の光」「送辞」「答辞」という式の流れの中で教師も親も子も声も出ない程にむせび泣く。それは、なんともいえない悲哀に満ちた卒業式であったように思う。

昨年の娘の中学校の卒業式は、音楽卒業式とでも呼べるだろうか。

三年間を通して、学年全員で取り組んだ合唱曲が式の間中流され続けた。

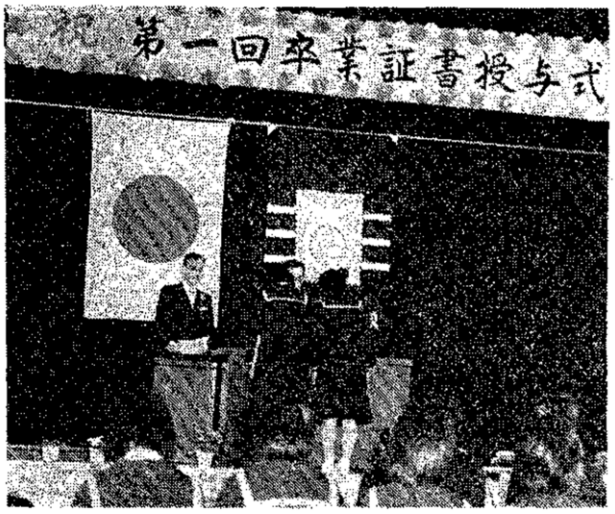
曲によって三年間の一コマ一コマが思い出されるのか、ドライな現代っ子の目に大粒の涙が光っていた。

それでも中学校の卒業式は、驚く程変わったという印象ではない。しかし、小学校の卒業式に昔のイメージは全く見られない。

六年間の思い出深いシーンが中央のスクリーンに映し出される。

一人ひとりの子供が、スポットライトの中で、それぞれの未来に向かって決意表明をする。それはまさに晴れやかな主役の顔である。「仰げば尊し」や「螢の光」に代わって、「巣立ちの歌」「ゴール目指して」「卒業の日よおめでとう」「贈る言葉」などが歌われる。

メッセージを書いた風船を飛ばしたり、タイムカプセルを埋めたり、学校によって工夫を凝らした卒業生のための卒業式がとり行われる。



数々の思い出を胸に、卒業していく生徒たち。
未来に向かって新たな出発をしてほしい…

過去を振り返って別れを惜しむというのではなく、未来に向かって新たな出発をするのだという強い調子の言葉が続く。

しかし、私の耳に子供たちの強い意志は響いてこない……。

ある調査によると、「いつまでも大人になりたくない」あるいは、「中学校へは行きたくない」と感じている子供が非常に多いという。それは、つまり自分の「未来」や「中学校生活」に、夢も希望も見い出せない子供が多いということになりはすまいか。

いや、もしかしたら、現在の大人社会に幻滅しているのかも知れない。

一方、卒業を「解放」と感じる子供たちも少なくない。それは、校則や体罰などで強化された管理からの「解放」なのだろうか。それとも受験戦争に明け暮れた、ゆがめられた「青春」からの「解放」なのだろうか。

何はともあれ、長びいた冬に、やっとほころんだ梅花の中を、彼らは新しい生活の中へ巣立って行く。

そして、二十一世紀に、私たちが造った「社会」を引き継いで担っていく。

その時、彼らは、私たちの「文化」をどのように評価するのだろうか……。

文・水谷信子

今号で「大東つれづれ帳」を終わります。

（昭和６０年４月１月号～昭和６１年３月１５日号）掲載分